

第10回広島湾研究集会

「藻場の機能評価と再生」 速報

首藤宏幸(水研セ瀬戸内水研)・井関和夫(広大院生物圏科学)  
谷本照己(産総研中国セ)・安江 浩(広島総研水海技セ)

2009年12月18日(金)、広島県情報プラザ多目的ホールにおいて、第10回広島湾研究集会が「藻場の機能評価と再生」と題して開催された。北海道から熊本県に至る60名(研究者40、行政関係者17、企業団体など3)の参加者のもと、広島湾を含む瀬戸内海の藻場の特性、その機能の定量的評価、藻場の造成手法について、6題の発表と総合討論が行われた。

桜井水産海洋学会長からのメッセージの紹介、前川広島県立総合技術研究所水産海洋技術センター長の挨拶に引き続き、コンビーナーを代表して首藤(水研セ瀬戸内水研)が趣旨説明を行い、研究発表を開始した。

最初に、基調講演として吉田(水研セ瀬戸内水研)から、広島湾および瀬戸内海の藻場特性のレビューと再生のための提言がなされた。瀬戸内海に特徴的な島嶼域に多数存在する「磯・浜」のセットが、アマモ場・ガラモ場が交互に形成されやすい環境を提供し、多様な漁業生産に結びついている可能性が紹介され、局所的、広域的の両観点から藻場再生を考えることの重要性が指摘された。

次いで、谷本(産総研中国セ)は、藻場機能の定量的評価の際の基本情報となる分布や面積を、超音波(魚探)を利用した装置を使ってリアルタイムで計測・マッピングする手法を紹介し、その有効性を示すと同時に、安芸灘のアマモ場面積の経年変化の要因を推察した。

続く3題では、藻場の機能を、水質浄化機能、仔稚魚育成機能、漁業生産機能から定量的に評価した試みが紹介された。橋本(広大院生物圏科学)は、広島湾南部のガラモ場の生産・分解量を評価するとともにリンの吸収・放出量を計算し、藻場が河川からのリンを取り込み、さらには難分解性有機物として蓄積することにより、水質浄化に役立っていることを定量的に示した。小路(広大院生物圏科学)

は、仔稚魚の成長・生残に果たす藻場の役割を紹介するとともに、瀬戸内海中央部の藻場の機能をメバル仔稚魚の生産に基づいて評価し、その経済効果の試算結果を示した。堀(水研セ瀬戸内水研)は、瀬戸内海全域を対象に、GISを用いて魚類の空間分布と沿岸域の景観構造の関係を解析し、藻場の影響が及ぶ空間範囲を推定するとともに、藻場との関連が最も強いことが示唆されたメバルについて、藻場単位面積当たり漁業生産量の試算結果を示した。

最後に、相田(広島総研水海技セ)は、アマモ場造成手法として、苗床シートの有効性と量産化技術を紹介するとともに、海底敷設の低労力・低コスト化を図るための新しい方法を提案し、技術の実用化と普及への道筋を示した。

総合討論では、藻場の機能を定量的に評価する試みの重要性が強調されるとともに、その評価結果を行政や水産業界の現場に積極的にアピールする必要性も確認された。また、喪失した藻場の造成、残存する藻場の維持のための実用化技術の開発に期待が表明された。一方、藻場の機能評価や造成・維持を推進するための基礎として、モニタリング体制の確立が急務であることも指摘された。

